

## 第1章 ハムレットと私

—台詞はいいね、僕がやってみせたみたいに舌の上を軽く転がすように言う。

大体君ら役者連中はわけもなく力みたがるが、あんなのじゃ街の

触れ役に頼んだ方がました。—

ある賢者は言った「もしあなたが自分が心から愛することをするのであれば、人生において一日たりとも我慢して働くということはないでしょう。」

そう、私は大好きなことをしてきたし、一日たりとも我慢して働いたことはありません。

私は演劇にとりつかれた人間です、ラジオ、舞台、そして映画、TVにいたるまで、あらゆる形においての演劇の、です。演劇狂という虫は、私が母とミネアポリスの母の両親と、ミネアポリスの西ブロードウェイ1826番地の、スタッコ壁の家の二階に一緒に住んでいた4才か5才のときに私に入り込みました。その時に、私の母がフォニックスの初期の方法を使って、英語における、あのもっとも有名な戯曲ハムレットからの一節、「生きるべきか死ぬべきか」の独白、エイボンの詩人、ウィリアム・シェークスピアによる生と死の意義の黙想、を教えてくださいました。

私はおじいちゃんのロッキングチェアに殆ど動かずにすわっている母に向かって立ち、永遠に私の頭の中に存在し続けるあの独白を、リズムにのって繰り返し暗唱していたのを今でも覚えています。そして独白の全て、最初から最後までを暗唱できるようになった時、母は言いました、「さあ、あなたはこれでひとりの役者よ」。そしてそのとき、75年も前のある暑い夏の日々に、私の役者としての運命が舞い降りたのです。

当時、こういう私みたいな人間を「見栄っ張り」という言葉を使って表現していたと思います。ただその夏以来、この別の人物になりきるといふこと、そしてどのようにすると人々の注目を集めることができるかということを理解するためにあらゆる努力をしました。その過程において多少なりともしり込みをすることがあったとしても、それはすべて私をミステリアスかつ完全に幸せにしてくれるものでした。

もちろん5才の子供に、シェークスピアの感情の皮肉と悲哀で覆われた、見事な言葉使いが理解できるわけはありませんでした。私がかつていたことは、その言葉は母にそそのかされて、人の前でその独白を暗唱するときにはいつでも、人々に微笑み、拍手喝をさせると言うことだけでした。独立記念日のお祝い、教会のつどい、イースターそしてクリスマスさまざまな機会にこの独白を演じました。どうりで、この35行の台詞が今日まで私の脳に刷り込まれている訳です。

1939年の夏私は6才で、一人で格好いいツインシティズ・ハイアワサ列車にのってシカゴへ旅をしました。名前、住所、電話番号などキャプテン・マーベルのメモに書いて、半袖シャツに止めてです。私は興奮して我を忘れる程でした。母が私をシカゴへ寄こしたのは、母の新しい夫そして継父になるであろう、ジョン・ラッド。コナーに会うためでした。（私の母と本当の父 ウォルター・ヴォーンとは6.7年前に離婚していました。）母とジョンはちょうどシカゴ・フェデラル劇場での数シーズンの公演を終えたところでした、シカゴフェデラル劇場はアメリカの歴史史上最初でかつ唯一の政府支援の劇場でした。しかし、連邦劇場プロジェクトはその6月に廃止されていました—悲しいかな—作家、俳優そして監督達の共産主義への共感を引き合いに出した議会の立腹が主な原因でした。

その最後の公演でジョン・コナーとイアン・キースがシェークスピア劇のオセロとイアゴ—高貴な的外れなヒーローと不可解な悪意に満ち溢れた悪役—

を交代で演じました。ジョンにとってはこれはちょっとした成功でした。キースは当時全国的に知られた俳優で 20 世紀前半ではあの伝説の偉大な俳優バリー・ムーア（彼自身今日、彼が大物であったということよりも、単にドリューのお祖父さんとして、記憶されているようですが）を例外として、もっとも才能ある俳優として広く認められていたのです。キースが憂鬱なデーンを演じたときにはジョンはその伯父クラウディアスを、そして母はガートルードを演じたのです。（ミネアポリス連邦劇場での初期の制作では母はオフエリアを演じていました。）

かようにハムレットは私の成長とともに、仮に私の血の中に流れていなかったとしても、いつも周りに存在していました。しかし、39年の夏までにフェデラル劇場の思い出と共に、ジョンと母は一文無しになっていて、シカゴのメインストリートのステイト通りをちょっと入ったところの地区のバーで、その店の世話をし、26 と呼ばれる人気のさいころゲームの女主人役を勤めながら、なんとか飢えをしのいでいました。そして、そこがああ蒸し暑い不景気の夏の間、彼らと一緒に過ごした場所でした、シカゴと云う大都会の世界と母と彼女の夫になろうと言う人の周りに集まる劇場関係者の大人の世界を垣間見て興奮していました。

その同じ夏、偶然にも、シカゴのセルウィン劇場で「マイ・ディア・チルドレン」という作品が公演されることになり、あの偉大なジャック・バリームーアが主役を演じることとなりました。

彼はこの地方公演をほぼ1年近く行っており、彼が演じた殆ど全ての街の劇場で完売状態でした。その劇自体は大いに忘れられやすいものでした：唯一の魅力はジャックの自由な、やや酔っ払った主役の解説、舞台の張り出し部分に座り、愛想良く観客とおしゃべりをし、少々際どいジョーク言っているものでした。観客はこの有名な映画スターの酒びたりのふにやふにや状態を充分把握してなかったようで、彼が舞台を漸く去る時には、必ず総立ちの拍手喝采を受けていました。

バリームーアがその舞台の唯一かつ偉大な強みであったことから、プロデューサー達は彼の価値を守るために用意周到に計画をしました。彼らはカールと言う198センチもある男性看護師を雇い、スターが毎晩ノースサイド近くのバーをはしごするのに付き添い、夜が明けようとするころに、有名なアムバサダー・イースト・ホテルの素晴らしい部屋まで運び、そこには、用心のためにカールが操作する資格のある酸素 TENT を備えていたのですが、と言う世話をさせました。

ディヴィジョン通りのバーは、バリームーアのお気に入りの場所のひとつでした。あるあたかなその夏の8月のある夜に、私は母が大きなアイリッシュシチューが入ったボールー数少ない母が料理できるものの一つを継父の夜食のためにとどけるのについて行きました。ジャックとカールはバーで称賛するファンの人々と長々と話をしていました、うだるような暑さの影響を受けていないかのように、彼は黒のクロッシュ帽子と黒のマントを来て、FDR サイズのたばこホルダーを振りかざしていました。その時、初めて、いつもその名前を耳にしていた偉大な舞台俳優を目の当たりに見たのでした。

一二杯のトムコリンズで強気になったのか、母は自分の息子の演じるハムレットをバリームーアに見てもらいたい機会と思ったのでしょうか。

母は私の小さな肩を掴み、伝説のスターの前に押し出しました。「さあ、ロバートやっ」と私をつつきました。周りは静まり返り、バリームーアは私の顔を覗き込み、微笑みかけました。そこにいた全ての人の目が私に集まりました。すでに認めてもらえるような感じがありました。

バーの止まり木に寄りかかり、6歳の子がふるい起すことができる全ての尊厳と哀愁をもって劇的なポーズをとり、その偉大な独白を演じ始めたのです。

存在することの是非、それが問題として突きつけられている。

どちらが高潔な人間か、凶暴な運命の

矢玉を心中じっと耐えしので生き続けるのと、

そうして続け、あの響きわたる、印象的な句、「待てよ、眠れば、夢を観るかもしれぬ」「権力者の不正を傲慢の徒の無礼を」「旅人の帰らざる彼岸の未知の国、」そして残りの全てを通してやりました。私が「つまりはこのためなのだ。」の台詞で終わると、そのささやかな観客は絶賛の嵐となり、バリー・ムーア自身も立ち上がり、大きな声で「もっとやれっ！もっと！」と叫んでくれたのです。

残念ながら私はこれしかできない子どもでした。しかしこのスターの反応に喜んだ母に促され

。。。同じ独白を何度も演じることとなりました。

私が9月にミネアポリスの学校に戻る前に、その偉大な人を別の機会に何度かおもてなしすることができました、変化をつけるために「ケイジー・アト・ザ・バット」からの詩も加えました。

バリー・ムーアはそれから3年後に亡くなりました。彼はちょうど60才でした。

それが私の若い時のハムレットとバリー・ムーアとの関わりの終わりでした。中学生であったあるとき、13才か14才のころ、私はジャーナリストのジーン・フォーラーが1944年に書いた、彼の友人であるバリー・ムーアの伝記(そして思いやりのある賛辞)「グッドナイト・スウィートプリンス」に出くわしました。そして、ノースハイスクールのジャーナリズムのクラスで、一般的な不信感に対して(退屈であったということではなく)、級友たちに劇からの台詞を読み聞かせた記憶があります。それからミネソタ大1年までに再びハムレットの演劇にかかわることとはありませんでした。

1952年の春、大学1年の最終学期で、私は大学で、ミネソタディリーのためのボクシングとフットボールについて書きながら、ジャーナリズムを専攻し、その合間に演劇とラジオの講座に入り込んでいました。その前年の夏、私は継父の突然の死で未亡人になった母をカリフォルニアへ車で連れていきました。継父ジョン・ラッドはお酒の飲み過ぎにより1951年3月に亡くなりました、39歳でした。ルーズベルト病院の医者はこのような若いひとの肝硬変の最悪のケースであったと言いました。私は悲嘆にくれました。

しかし、西海岸に住むために移住する前に、私はチャック・ラ・ボウと私は春休みをニューオーリンズのマルディ・グラスで過ごすことに決めました。(チャックは私の子供時代が一番仲の良い友人で、高IQソサエティ、メンサの会員になりました、その時代には稀な優秀な人です)。私の実の父からのほんの少しの遺産を浪費するには良い機会だと思えていました。実父ウォルター・ヴォーンは1950年1月になくなり遺言に残してくれました。しかし、チャックと私が出発する前日に誰かが私に演劇学部の学部長ホワイティング教授からの伝言がスコット・ホールの掲示板に張り出されていると知らせてくれたのです。(ホワイティング教授はガスリー教授とともにのちにミネアポリスにあるガスリー劇場を創設するのに大きく貢献しました。彼らのこけら落とし作品は一もちらんーハムレットでした。)

ホワイティング教授の伝言は「学部の主役を演じる一人、ジム・シュローダーが、学部 春公演のハムレット、レアティーズ役を降りたので、やってみる気はないか？」というものでした。「やってみる気はないか？」私はすぐに旅行の計画をキャンセルし、リハーサルに直行しました。後に本来4年生がメインの舞台に1年生を起用したのは学部始まって以来のことだと言われました。

公演は成功し、最終公演の時に教授から別の手紙が届きました。私に「レアティーズ役を提案したのは、正直なところ、緊急のことだったので何度もそのあと心配していた。しかし今はその年で決断した中では最高の決断であったと分かった。」というものでした。

その後、1年の終わりに、たまたま教授にバッタリ会った時、彼は、ミシシ  
ピー川のボートで夏の制作としてハムレット公演の計画を立てているところ  
だと言いました。「そのとき声をかけたらまたハムレットをやってくれるか  
い？」と。

もちろんやりますとも、私はもうすでに独白を覚えているのですから。

しかし、なんらかの事情でそのボート公演は実現しませんでした。しかしも  
うその時までには、私はもうすっかり演劇にのめり込んでいました—でも良か  
ったのです。1952年秋、私はロスアンゼルス シティカレッジに入学しま  
した。ここで翌年私は俳優仲間たちにあの有名な独白をなんども何度も繰り返  
し聞かせることになるのです。

\*\*\*

ローレンスオリビエ卿はハムレットを「決断のできない男の話」と表現して  
いました。

その当たり障りのない表現は精神の複雑さ、生と死が劇の趣旨あるというこ  
とをほのめかしています。エリザベス朝後の役者の誰もの生涯の目標がハムレ  
ットを演じることでした。そしてありとあらゆるハムレットが俳優あるいは女優  
によって演じられているのです。

私もほかの悲劇役者たちと同様の夢を持っていました。1960年代の初め  
に、いよいよその時が来た、と思ったときがありました。ミネアポリスからの  
電話を受けた時は、私はあらゆる授業、ワークショップ、ハリウッドの小劇場  
に没頭する野心に満ち溢れた若き俳優でした。以前言っていたガスリー劇場  
の準備ができたので、こけら落とし公演のハムレットで主役をやることに興味  
があるかどうか確認の電話でした。私は興奮して、「イエス」と答えました。  
すぐにウィリアム・モリス事務所の私の代理人のスタン・ケイメン（ステー  
ブ・マクィーンに紹介された会社の代理人）に是非ともどんな価格でも交渉  
するように依頼しました。

ケイメンが残念な知らせを電話してくるまで一時間も経っていませんでした。「不成立！お金のことじゃないよ、彼らは君に1シーズンまるごとガスリー劇場専属として契約してほしいんだ。ボブ、君の俳優としてのキャリアが花開こうとしている今、そんなことにうつつをぬかして飛び回っている時間はないよ。」（これが当時ハリウッドの人達の、今で言うレッドステイツ-保守的な州-の言い方でした） 私はグッと我慢して、彼のアドバイスを受けてガスリーには行けないと伝えました。

しかし、これだけが、憂鬱な王子を演じる機会だったわけではありませんでした。1960年の春、ロスアンゼルス州立大学(シティカレッジの上位大学)で劇場芸術の修士号をとろうとしていた時です、学校はちょうどその時、数百万ドルをかけた劇場を完成させるところで、私はすでに大学でアーサー・ミラーの「ア・ビュー・フロム・ザ・ブリッジ」を公演するのに学友のトニー・カルボンやジェームズ・コバーンに対して演出しているところでした。大学の演出家たちがある計画を思いつきました：この劇場のこけら落としにハムレットをやったらどうだろう、そしてあの威勢の良いロバート・ヴォーンに主役をやらせてみたらどうだろう。私はすぐにその機会に飛びつきました。

ミラーのドラマを終わらせてからあまり準備の時間はありませんでした。私はすぐにハムレットに関する大量の文芸批評に浸りこみました。ハムレットという少年/青年、そして、殺害された彼の父の亡霊の願いを満足させることのできない無能さについて出来得る限りのことを勉強しました。

私は、チューダー王朝時代(1485-1603)のハムレットについての重要な議論に焦点を絞ることに決めました：ハムレット王の亡霊は若いハムレットの深い悲しみと鬱状態による単なる幻覚なのか、はたまた、ほとんどのエリザベス朝時代の人々が信じていたように、生きてい者からのが亡くなった愛する人に救いを求め、現れた本当の魂なのか？あるいは他に第三の説明があったのか？



ほとんどのキリスト教信者は死を天国か地獄かどちらかに行くと考えています。しかし、カトリックの考えでは亡くなった大多数の人は、一度煉獄におかれ、罪を洗い清められたのちに至福の天国へと送られると信じられています。しかし、ハムレット王は罪の重荷からの解放を求めているのではなく一彼は自分を殺害したクローディアス、若いハムレットの継父で妻のガートルードの今の夫である彼を殺すことでの復讐を求めているのです。

ヴィッテンベルグ（宗教改革発祥の地）で教育を受けた若きハムレットは、16世紀の宗教改革のより高度な理論一本当の亡霊など存在しない、亡霊は妄想、もっと悪く言えば変装した悪魔である一という考えを持っているように見えます。しかし、劇でわかるように、彼の態度は揺れ動くのです。初めハムレットは彼が見たものは「偽りのない亡霊である」と信じていると言います。そして、確信がもてなくなり「私が見た幽霊は悪魔かもしれない」と言うようになる。さらなる亡霊が本当のものであるという根拠を求め、ハムレットはデンマーク王室を訪れていた劇団に、クローディアスとガートルードの前で自分が脚本を書いて「ゴンザガの殺人」という劇を行うことを依頼するのである。父がハムレットに話したように殺人を演じてみせることにより、クローディアスが白状し、ハムレットの疑問が解決されること願うのです。

ハムレットは、その時、心が数方向に引き裂かれているのです、責任と疑い、確信と恐怖、理性と信仰、科学と迷信の間で。この相反する感情の交差（アンビバレンス）が役者にとって演じてみたい永久的な魅力のひとつなのです。

そこでハムレットの「狂気」についての疑問がでてきます。それは本物なのか？それとも偽りなのか？彼は正気から錯乱へ動くのか？あるいは、その二つの中間にいるのか？

数世紀に亘り、研究者たちがこれら全ての見解について議論を続けており、また役者たち（偉大な役者も含め）もまたそれぞれのいろんなイメージでハムレットを演じてきています。私について言えば、ハムレットは正気と狂気の境目を、父の亡霊に初めて対面したときに越える、それも望んでではなく、ど

うしようもなく仕方なく、と信じています。同様のことが若きハムレットが、彼の継父が父を殺害に関与したことを確認した劇中劇の後、母の寝室を訪れ、父の亡霊に会う時におこります。これらの亡霊との数回の対面の間に ハムレットはオフェリア、ポロニアス、ローゼンクランツ、ギルデンスターンらと話をするときには狂気を装うのです。彼はこれを彼らを試し、真相を明らかにするために意図的に行うのです。彼はギルデンスターンに秘密を打ち明けているときに欺いていることを殆ど認めました、「僕が気の狂っているのは北北西の風邪のときだけだ。南の風なら鷹と鷲ぐらいの区別は付く。」「たしかに狂気ではあるが、」とポローニアスは適切に観察するのです、「どこかに筋が一本とおっている。」と。

狂気を装うハムレットは奇妙で信じがたいものではあるが、現実社会においてかならずしも未知の現象ではないのです。ガンザー症候群として知られているその精神障害はほとんどいつも精神的に落ち込んでいるときに冒されます。エリザベス女王時代には、今日われわれが「クリニカル デプレッション」"うつ病"あるいは「situational depression"反応性うつ"(離婚や最愛のひとを失ったとき、深刻な病気になったりしたときに現れる)をメランコリア(うつ状態)と呼んでいました。よって「メランコリックデイン」(鬱なデンマーク人)というあだ名がよくハムレットを描写するのに用いられるのです。

私は何年も前に、シェークスピアを「ストラットフォード・オン・エイボンの最初のしろうと精神分析医」と称したことがあります。この観察の根拠は、彼のもっとも有名な頻りに上演されるキャラクターの、比類まれなる知性にあります。しかし、専門の精神科医でさえもこのガンザー症候群「解離性障害」を正真正銘の精神障害なのか、大変な世界を生き抜くために相手を出し抜く手なのかをどうか判断するのは困難であると言います。よって、ハムレットの狂気についての論議が今日まで続いていても驚くことではないのです。

1960年の私の公演は上手くいきました。ロサンゼルスタイムズの論評は、私の演技はあのロンドンのオールドヴィックス劇場で公演したジョン・ニーヴ

イルに匹敵すると好意的なもの—若い役者にとっては本当に心が浮き立つような称賛でした。

ハムレットはその後の私の人生を通してずっと私についてきています。私は50以上ものハムレット公演を観ています、イギリスの役者ジョージ・ラッセル・ミード、ブルックリン音楽アカデミーでは、ちょっとかっぶく良かったです（温かく誠実で、しかし、ひどく傷つきやすいわけでも、芝居じみていたわけでも、空想じみていたわけでもありません）その彼から、1995年ブロードウェイのラルフ・フィエンヌの公演（私が今まで観た中では一番良い）まで。私は「0011 ナポレオン・ソロ」をやっている時にハムレットのアルバムまでレコーディングしました—私の心からの芸術としての努力でしたが、残念ながら、単にレコード会社が儲けるために、1960年代半ばの十代の子たちに私の名声を使ったと言わざるを得ません。

ハムレットは私が「この世の煩わしさから逃れるために死ぬ」まで、そして「旅人一人たりとももどることのできない未知なる国」へ旅立つ時まで、私の心を奪い続けるであろうと確信しています—もしそんな国があればですが。そして恐らく私の口からでる最後の言葉は、その遠い昔ミネアポリスでの夏に覚えさせられた、あの35行の独白の一部が含まれているでしょう—最後の最後まで。。。見栄っ張り。